**星野五郎兵衛 (左）**

星野五郎兵衛は7年がかりで独力で華厳の滝への道を開拓した。彼はプロジェクトを開始したとき、彼はすでに60代で、道路は1900年に開通した。それ以前は、滝の上半分の景色が見える展望台が最も近くで滝をみることができる場所だった。五郎兵衛の道はもはや存在せず、滝の地上階は現在、1940年に開通したエレベーターでアクセスすることができる。

星野五郎兵衛が二荒山神社に華厳の滝への新たな道の開通を求めた手紙（左）と、小杉放菴が二人の出会いを回想して描いた絵（放菴の「故郷」より）がある。

これによると、放菴（当時はまだ国太郎という幼名で通っていた）が少年の頃、春のある日、道路で作業中の五郎兵衛に会いに行ったという。五郎兵衛が崖の途中で立っていると、突然、頭の上で異音がして、土や岩や氷や雪が一気に落ちてきた。五郎兵衛は国太郎に「飛び降りろ」と叫ぶと、国太郎は飛び降りた。それが終わると、五郎兵衛は舌を出して笑ったが、国太郎の膝は震えていた。

下の写真は華厳の滝つぼ近くの五郎兵衛茶屋。

 \* \* \*

**大島藤三郎 (右)**

大島藤三郎は、奥日光の中宮祠地区の経済発展に尽力した住人である。大島は群馬県の上州で生まれ、明治維新後に日光に移り住んだ。大島は明治維新後、日光に移り住み、学校の教師や郵便局の経営などを行った。

また、大島は漁業界の柱でもあった。トーマス・グラバーと親交があり、グラバーの湖畔の別荘の経営を任された。1886年（明治19年）には中禅寺湖漁業組合を設立し、1893年（明治26年）には湯川で魚を放流したという記録が残っている。

大島藤三郎の日本漁業協会会員証（左）と明治末期の大島家の写真。